

## 序文

本年も、毎年恒例となっております日本造血細胞移植学会全国調査報告書を会員の皆様方にお届けする事が出来ました。平成 20 年度に日本造血細胞移植学会、骨髄移植推進財団、日本臍帯血バンクネットワーク、小児血液学会の関係各位のご尽力により、造血細胞移植のデータ一元化が行われ、年々充実した内容になって参りました。日常の多忙な診療業務の中でデータを登録された全国の移植医療施設の先生方、日本造血細胞移植学会データセンターの名古屋大学造血細胞移植情報管理・生物統計学講座の先生方、血液疾患臨床研究サポートセンターの関係各位に深謝申し上げます。

本邦における造血細胞移植総数は増加を続けており、平成 18 年に年間の移植件数が 4,000 例を超え、その後も増え続けています。最近 5 年間では、自家移植、血縁者間骨髄移植は横ばい、一方、血縁者間末梢血移植、非血縁者間骨髄移植、同種臍帯血移植が増加しています。特に、同種臍帯血移植が急増しており、平成 22 年度には 1,000 例を超えています。内訳をみると、その 7~8 割は成人に対する移植で占められています。その背景には、骨髄非破壊的造血幹細胞移植の普及に伴う移植年齢上限の高齢化があります。また、骨髄バンクを介した末梢血幹細胞移植の開始に伴い、非血縁者間末梢血移植の増加も予想されます。

私たち会員には、この貴重な蓄積データを今後の移植治療に反映させ、移植成績の向上を図ることが求められています。現在、一元管理委員会を中心に多くのワーキンググループが結成され、それぞれのグループで活発な活動が始まっています。近い将来、多くのデータ解析から臨床研究が進み、その成果が日本のみならず世界へ発信される事によって、今後の移植医療の発展が期待されます。

この調査報告書が、全国の移植医療に携わる会員の皆様方の日常診療の一助となり、今後の移植医療の発展に役立つことを心より願っています。

平成 24 年 2 月

第 34 回日本造血細胞移植学会総会会長 菌田 精昭  
(関西医科大学大学院医学研究科 先端医療学専攻 修復医療応用系 幹細胞生物学)

## 序文

日本造血細胞移植学会平成 23 年度全国調査報告書が完成致しましたのでお届け致します。本報告書の作成に当たり、名古屋大学造血細胞移植情報管理・生物統計学講座の諸先生、そして何よりも移植施設の方々の努力と熱意に感謝と敬意を表します。

報告書を見て参りますと、移植登録総数は緩やかなペースではあるが、増加の一途をたどっていることが分かります。

各種疾患毎の移植数の推移や移植法別の数など、我が国における造血細胞移植の臨床統計は、我々が日常診療の際に移植適応を考える上でも大変参考になるばかりでなく、これからのprospective studyの礎ともなるものです。一元化登録事業により収集されたデータを活用すべくワーキンググループが平成22年に組織され、我が国から造血幹細胞移植に関する有用なエビデンスが多数発信されつつありますことは誠に喜ばしいことと思います。

我が国での疾患登録がなかなかうまくいっていない中で、造血細胞移植に関しましては全国レベルで毎年定期的にまとめ、だれでも必要に応じてそれを参照し、臨床にあるいは研究に利用出来るようになったことの意義は誠に大きいと言えます。この資料が多く数の移植関係者の診療の一助となり、我が国のさらなる造血細胞移植医療の発展に活用されるよう願って前書といたします。

2012 年 2 月

日本造血細胞移植学会データ管理委員長  
坂巻 壽